

思考へと導く心地よい図書室

神鋼記念病院 病院長 東山 洋

「図書室・図書館」と聞いて心地よい気がするのには私だけだろうか？ いや、多くの人が「憩いの空間」と答えるだろう。誰にでも青春時代があり、図書館の思い出はある。昭和世代の私は、学校の図書室・市の図書館・大学の図書館・さまざまな病院の図書室に半世紀にもわたってお世話になってきた。多くの人と同様、必要な時に自分の意思で勝手にしか行かない場所であるが、いつも温かく迎えてくれる。と言っても「お帰り」とか「いらっしゃい」とか言われることはない。食べ物も禁止だ。入室を拒否されることもなく自由に入れるが、わが家ではない。むしろ家より心地よい時もある。なぜか？ 現実のさまざまな葛藤から一瞬のうちに「静寂の世界に引き込まれ自分独自の世界に入れる」ことが一つの要因と思われる。まさに静寂と神聖の空間だ。しかも多種多様な集団の中で各自が自分の世界で自分の必要なことを享受できる。むしろ周りの目があるので逆に集中できるという意見すらある。それなら通勤時間帯の車内で多くの人が「狐顔」でスマホに夢中となり、常時莫大な情報の中で仮想空間に浸っているのは心地よいのか？ いや違う。静寂な世界を守れば非難されることはないが、他人に対する気配り・思いやりの欠如は公共の場とすれば見苦しい。さらに決定的に異なるのは、図書館には「考える・思索できる何か見えない環境」が存在することだ。この環境こそが心地よいのだ。思考することで脳の中に刻み込まれた

思い出は、図書館という言葉で過去の多くの心地よい記憶を蘇らせてくれる。

医学は日進月歩である。医学書は超高額だが内容はすぐに古くなるし、最新の教科書でも発刊された時にはすでに時代遅れであることも多かった。このため病院図書館は研修医にとって貴重な存在であった。またありがたいことに、外科手術手技は現在のように腹腔鏡下手術やロボット支援下手術が主体になるまでは内容に大きな変化がなかった。もちろん腹腔鏡下で見ることで、より拡大視効果があるため見直された部分はあっても、手術内容や解剖学が大きく変化することはない。外科研修医の時代、手術が終わった日の深夜は借りてきた古い手術書（名前は最新外科学体系だが当時でも30年以上も古かった）にお世話になった。手術記録を書くため、ひと晩かけて絵の部分を書いていた。当時の研修医は、鉤を引くような肉体労働が中心で手術術野など見られなかった。「手は出しても顔は出すなよ」とよく言われた。でも手術記録は研修医の仕事だ。以降私の手術記録は、一貫してへたくそなスケッチと所見・手技のコメントをできるだけ簡便に周囲に配置するスタイルが中心となった。当時の医学雑誌でも「私の手術記録」として、有名な外科医たちが1枚のスケッチと簡便なコメントを掲載しており、興味深く拝読したことを思い出す。必要な情報を一枚の紙に視覚的にそして関連性が理解できるように記述し、全体がイメージできるように書かれていた。この手法って何かに似ている。絵と図が中心で、その周りに所見・補足・考察の文

章を書き込んだ紙葉。そうだ。かの有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの『解剖手稿』である。現在英国ウィンザー城にある王室図書館に所蔵されている。

“モナ・リザ”や“最後の晩餐”といった絵画などで有名なイタリア・ルネッサンス期を代表する最大の芸術家の一人であるレオナルド・ダ・ヴィンチは、人類史上初めて正確な解剖学スケッチを行った人物である。残念ながらそのスケッチを出版しなかったために、「近代解剖学の祖」はアンドレアス・ヴェサリウスのもの(De humani corporis fabrica libri septem 『ファブリカ』, 1543)となってしまった。レオナルド・ダ・ヴィンチは芸術家でありながらも水力学・機械学・軍事工学・地質学・天文学・数学・建築学などに関心を寄せ、解剖学研究にも打ち込んだ。その結果、知的探究の軌跡を詳細に記録している膨大な手稿群が遺されたが、その中でも驚嘆に値するのは『解剖手稿』である。真実を自分の目で確かめてそれを正確に表現する。人体構造を遠近法から取り入れた立体的な図譜と自筆原稿(手跡は大半が草書体のイタリア語で、しかも左右が逆転した鏡文字で記されている)で表現している。権威や過去の知見に流されず、鋭い洞察力から得られた事実のみを重視する科学的思考法を貫いた。絵の素晴らしさもさることながら真実を追求する精神力は神秘ですらある。500年以上も前に、動脈硬化の病態や大動脈弁の機能を正確に描写していたなんて想像もつかない。私の手術記録とは雲泥の差だ。『解剖手稿』を知って以来私の手術記録は、絵は足元にも及ばないが、手術所見と手技だけは観察を通じて得たものだけを正確に記載するようにしてきた。「探究心と独創性を兼ね備

えた」という意味だろうか? 「万能の天才」との意味があるのだろうか? 内視鏡下手術用ロボットの名前は、「ダ・ヴィンチ外科手術システム」である。当院では2015年に導入し、現在前立腺癌切除、腎癌部分切除、直腸癌切除が保険適応の基準を満たしている。最新機器の恩恵は今後もますます大きくなっていくだろう。

現在は情報通信技術(ICT)の時代である。多くの人が常時スマホを操り、情報洪水の世界に浸っている。この結果、職場や家庭内でも人間としての思いやりを欠如した事件報道が後を絶たない。他人への思いやりも含めて思考することがなくなれば、人類は滅亡の一途をたどるかもしれない。どこにいても書籍の内容や多種多様な情報がスマホで常時閲覧できる環境では、人としての会話や感情さえも加速度的に減少していくように感じる。医療分野でもICTの恩恵により、AI(人工知能)診断・ロボット支援下手術・遠隔手術などは、少子高齢化社会における医師不足や地域偏在に対する解決策の一つである。しかし、患者さんとの心の交流が欠如すれば医療とは言えない。莫大な玉石混合の情報を取捨選択し、思索し、考察できなければ、人としての存在価値が物に替わる可能性もある。人間の脳や眼や体はICT時代を想定して創られていない。思考がなければ当然思い出も生じなくなる。静かで高尚な空間がなければ、通説や常識を疑う姿勢で物事を考えたり瞑想にふけったりもできなくなる。「ICT世界が日常になれば図書館は必要ない」という意見も出てきているが、私は「絶対必要である」と思う。なぜか? 答えは既に出ている。図書室・図書館は単に情報を集積し提供する場所のみではないからだ。